

福井園彦・他 編

脳卒中最前線

〈急性期の診断からリハビリテーションまで〉

大隈秀信（産業医科大学リハビリテーション医学教室）

脳卒中治療上の諸問題は、実に多岐にわたるものだということを、本書を一読していまさらながらに痛感させられた。本書は、リハビリテーションセンター鹿教湯病院設立 30 周年を記念して企画されたということであり大部分の執筆は、鹿教湯病院リハビリテーションチームの各職種の専門家と鹿教湯病院関係者が分担している。

急性期の診断や治療から、リハビリテーション訓練、高次機能障害や二次の合併症等に対するアプローチ、社会復帰にかかわる諸問題等が設置された 117 の質問に回答する形で簡潔にまとめられている。

脳卒中リハビリテーションの第一線で活躍中の各分野の専門家が

自分の経験と見識を臨床家の立場で解説しており、多少の内容の偏りはあるにしろ、脳卒中リハビリテーションの諸問題が具体的イメージとして鮮明に把握できる点で、大変有用かつ興味深いものになっている。設問の内容は多彩かつ实际的で、一度に通読するよりも身近に置いておりにふれ興味のある項目のページを開きたくなる本である。また各テーマごとに主な参考文献が紹介されている点は、実際非常に便利で有難い。

急性期のリハビリテーションを含めたりハ訓練の具体的な技術や留意点が平易に解説されている。一方、質の高い ADL 獲得のためにより専門的で多角的なアプローチを必要とする高次機能障害、回復の阻害因子としての各種機能障

害や合併症に対するアプローチは、多方面にわたってゆるぎのない優れたものであり脳卒中リハビリテーションのエキスパートとしての鹿教湯病院の面目躍如といった感がある。

最近、一般病院での急性期脳卒中の早期リハビリテーションの議論をよく耳にする。特に、二木立氏等の報告で第一線の一般病院においても脳卒中の早期からリハビリテーションを積極的におすすめることによって機能的予後の面で大変優れた成績が得られることが、すっきりとしたデータとして示されてしまった。

今後は、リハビリテーション専門病院、リハビリテーション専門家としてのアイデンティティを主張する議論もなされるべきである。

こういった時期に、臨床的かつ専門的な脳卒中リハビリテーションの集大成ともいえる本書が刊行されたことは、大変意義深いことと思う。

(B 5, 420 頁, ¥6,800, 1987. 医歯薬出版 刊)